糖尿病はがんと深い関係

がん社会を診る

中川 恵一

恩師の養老孟司先生との共著『養老先生、病院へ行く』（エクスナレッジ）は多く人に読んでいただき、発行部数も10万部に迫っております。この本は「病院嫌い」の養老先生が糖尿病に伴う心筋梗塞のため、東大病院に緊急入院した「事件」と、愛猫まるとの死別を通して、老いと死、さらに、医療のあり方などを語り合ったものです。

さて、あまり知られていませんが、糖尿病とがんは深い関係があります。実際、糖尿病患者の死因の4割近くが、がんです。

糖尿病はがん全体の発症リスクを約2割増やします。膵臓（すいぞう）がん、肝臓がんでは2倍にもなります。

しかし、私が医学生だった40年前は、末梢（まっしょう）神経、網膜、腎臓の症状が糖尿病の「3大合併症」と習いました。一方、がんとの関連については聞いたことがありませんでした。

当時、糖尿病患者の死因としては、心筋梗塞、脳梗塞、慢性腎不全といった「血管障害」がトップでした。糖尿病患者の死因のうち、血管障害死の割合をみると、1970年代、80年代はおよそ4割。それが、90年代は27%となり、2001～10年では15%まで低下しています。これは一般日本人の死亡割合より低い数字で、最近の糖尿病治療薬の進歩をうかがわせます。

一方、糖尿病患者におけるがんによる死亡割合は、70年代は25%でしたが、80年代、90年代は29%、34%と増加し、01～10年では38%を超えています。一般人での死亡割合より10ポイント程度高い数字です。

糖尿病患者のがん死亡を臓器別にみると、トップは肺がんでした。これは一般の日本人とおなじですが、2位は肝臓がん、3位は膵臓がんで、一般人より順位が上がっています。糖尿病になると、この2つのがんのリスクが2倍になりますから当然です。

日本の糖尿病患者の多くで、インスリンが効きにくい「インスリン抵抗性」が進み、血液中のインスリン濃度が高くなります。過剰なインスリンは発がんに関与する可能性があると考えられています。

その他、高血糖そのものによる酸化ストレスや慢性的な炎症も原因の可能性がありますが、がんが糖尿病によって増える詳しいメカニズムは分かっていません。

糖尿病の患者数は、疑いのある人まで含めて約2千万人と膨大な数に上ります。しかし、患者の4人に1人は治療を受けていないことがわかっています。とくに、働きざかりの人ほど受診していないことが問題です。

糖尿病の人は「がん予備軍」。食べ過ぎを避け、運動を心がけて、毎日体重計に乗ることをお勧めします。

（東京大学特任教授）

イラスト　中村　久美